



維新胎動の地
山口県

優秀作品集

明治150年記念

「やまぐち未来維新」学生作文コンクール

明治150年記念事業山口県推進協議会

中学生部門

最優秀賞

私を決意に導いた偉人

宇部市立川上中学校

三年

松本香菜子

1

優秀賞

私の性格と正反対な高杉晋作

柳井市立大畠中学校

一年

有吉 菜瑠

3

先人に教えられた大切なこと

宇部市立川上中学校

二年

佐々木 絢音

5

幕末の志士・吉田松陰

周南市立富田中学校

二年

吉武 詩織

7

高校生部門

最優秀賞

晋作から生き方を学ぶ

山口県立萩高等学校

二年

國廣 奈菜子

9

優秀賞

明治維新を支えた人

山口県立柳井商工高等学校

一年

川森 澄涼音

12

吉田松陰先生に学ぶ真心

山口県立柳井商工高等学校

二年

河内 優奈

15

小さな目標

山口県立柳井商工高等学校

二年

寺尾 友希

18

私を決意に導いた偉人

宇部市立川上中学校

三年 松本 香菜子

私が憧れる幕末の偉人は毛利敬親です。なぜなら、先日足を運んだ毛利敬親展で、世間が乱れている中で大きな決断をし、やがて明治維新に大いに貢献する藩に立て直した大業を目の当たりにして、強く心を打たれたからです。

これまで、毛利氏というと、存在そのものは認知していましたが、下の名前を耳にしてもなかなかピンときませんでした。そのような状態の時、この企画展の話が飛び込んできたため「この機会に、毛利氏について学んでみよう」と発起し、一度行ってみることにしました。

ところが、そこで目にしたものは私の想像を覆す驚きばかりでした。私は以前まで、長州藩が明治維新の話によく出てくるのは、有能な志士が偶然多くいたためだと考えていました。しかし、真実はそうでなく、この志士たちの活躍の裏には当時の藩主だった毛利敬親がいたのです。敬親は、苦渋の

決断を迫られながらも、長州藩のリーダーとして、日本の未来のためを思い、幕府に背く判断を下しました。この決断も明治、そして現在を創ってきた発端の一つと思うと、とても誇らしい気持ちになりました。

私には、「社会に貢献する」という志があります。これは、今まで支えてもらった家族や友人をはじめ、地域の方々に戻しをし、自分の故郷を守り、その誇りを胸に力強く前進していきたいという思いから生まれました。

でも、今の私には弱気な部分があり、また、敬親とは反対に優柔不断です。決断する際は、「どっちでもいい。」と無責任な対応をしてしまうことがあります。しかし、力強く前進していくには、幾多の選択を乗り越えていかなければならぬのではないかと考えるようになりました。これからは、毛利敬親を見習って、きっぱりと判断することや一度決めたら

最後まで貫くことを心がけていきたいです。それを達成することは自分の自信になり、結果もついて来ると確信しています。

さらに、自ら自分を改めていく上で、頭に入れておきたい言葉があります。それは、吉田松陰の「夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に夢なき者に成功なし。」という格言です。私はこの言葉を、「常に自分の夢を念頭に置いておかなければ、着地点が見つからず、成功することはない。」という意味で捉えました。夢を実現させるために、最終目標を常に掲げておくことが大切なのだと思います。

以上のように、毛利敬親や吉田松陰は、私が夢を追い求めていく上での新たな決意へと導いてくれました。今後はこの決心を礎にして、夢の実現のために、一直線な決断力と、決めたことを確実に果たす実行力を養っていききたいと思えます。そのためにも、日頃から夢を見据えてコツコツと小さな努力を積んでいきたいです。

そして、今年が明治百五十年という節目の年を迎えました。

ニュースや新聞などでさかんに取り上げられているのをよく目にします。幕末・維新の志士たちの偉業を語り継ぎ、山口県から発信していく使命が私たち山口県民にはあるのではないのでしょうか。私は将来の日本を担う者として、郷土のために、精一杯力を注ぐ人材へと成長していきたいです。

私の性格と正反対な高杉晋作

柳井市立大畠中学校

一年 有吉 菜瑠

小学校六年生の時に、初めて歴史を習いました。明治時代の授業で、山口県出身の偉人たちがたくさん登場してきて、山口県にはこんなたくさんの偉人がいるんだと驚きました。その中でも、早くに亡くなっているのに歴史に名前が残っている高杉晋作が、特にすごいと思ったので少し調べてみました。

高杉晋作は、萩の名家で生まれ、後取りとして大事に育てられました。幼少期は勉強嫌いだっただようで、そこは私と似ているなと思いました。十四才で、藩校の明倫館に入学しましたが、それでもまだあまり勉強しませんでした。けれど、後輩たちに先を越されてしまったので、ようやく勉強するようになってきました。そんな私とは正反対の負けず嫌いで強気な性格が、晋作を成長させたと思いました。十九才の時に、親友の久坂玄瑞に、吉田松陰が学問を教えている松下村塾に行

かないかと誘われました。しかし、松陰は牢屋に入れられ罪人扱いされていたので、両親に反対されていました。最初は行くのを諦めかけていましたが、退屈な日々には耐えられなくなり、夜に部屋を抜け出し松下村塾へ行きました。親から反対されるのは怖くて逆らうのが難しいけれど、そんなところで勇氣の出る晋作がすごいなと思いました。

それからは、自分の信念の尊王攘夷を達成するために、イギリス公使館に火をつけるといったとんでもない行動もします。私には絶対に思いつかないような作戦です。さらに、長州を守るため、奇兵隊を結成します。奇兵隊は、やる気の強い武士よりもやる気がある農民や町人を集めました。人の上に立って、このような新しいことを始めることは、とても大変なことです。私の出身小学校は小規模校なので、六年生の時もあまり下級生を引っ張っていくとは感じられま

せんでした。でも、四月に中学校に入学して、行事や部活動で、先生が仕切るといふより先輩方が先頭に立って動いていることに驚きました。私は初めての中学校生活にドキドキするばかりで、自分のことに精一杯の毎日です。こんな私ですが、いつか先輩方のように行事が仕切れるようになりたいと思いました。

一番すごいと思ったところは、四国連合艦隊との戦いで、敗れたにもかかわらず、藩を代表して相手の戦艦に乗り込み、いろいろな交渉をしたことでした。賠償金も長州藩ではなく、戦争の責任を幕府におしつけ、彦島を取られそうになっても、日本国は神様がおつくりになったものだからと言ってゆずれませんでした。冷静に考えればとんでもない言い訳のようですが、晋作の気迫に外国の人も負けたのでしよう。戦いに負けているのにこんなに強く言えるところに、弱気な私はとてもあこがれます。

晋作は、こんな言葉を残しています。「おもしろきこともなき世をおもしろくすみなしものは心なりけり」意味は、世界はそのまま面白いものではないが、それを面白くするのは、

自分の気持ち次第だということです。私は、宿題や部活の体力づくりは面倒くさい、つまらないと思いつつやっていますが、それでは上手にならないし、面白くならないので、晋作のようにどうしたら面白くなるかと考えることが大切だと思いました。面倒くさいことでも、いずれ将来に活かせる大切なことになるので、今度はどうしたら楽しくなるかを考え、工夫して生活していきたいと思いました。また、今の私はものすごく弱気ですが、薬剤師になりたいという夢があるので、夢の実現のためにも、信念を貫くためにいつも強気で行動した高杉晋作に少しでも近づけるよう、まだ始まったばかりの中学校生活で、先輩を見習っているいろいろなことに積極的に取り組んでいきたいと思いました。

先人に教えられた大切なこと

宇部市立川上中学校

二年 佐々木 絢音

私が尊敬する人物は、「毛利敬親」だ。彼は、藩主という地位にいながら、家柄や年齢にこだわらない人物だった。

私は、藩の重要人物というのは威張っていたり、着飾っていたりする人々だと思いついてきた。しかし、敬親はお国入りのとき木綿服を着て、質素な振る舞いをして見せたらしい。

これには、藩が財政難に苦しんでいたことに関係があった。自分の都合ではなく、周りの都合に合わせることは簡単ではないし、大変だ。自分ならできるかと問われれば、私なら返事に詰まってしまうだろう。

また、敬親は家臣の意見に対して異議を唱えることがあまりなかったそうだ。どのような意見でも、「うん。そうせい。」と言っていたらしい。私は、彼が家臣の意見を聞き入れていたのは、家臣に絶大な信頼を寄せていたからではないかと思う。家臣との関係が良く、また、家臣が賢い人だったのでは

ないだろうか。そう考えると、私は敬親が羨ましいと思う。私は、周りの人との関係も悪くはないし、信頼している。しかし、彼のように、とても信頼できる人はあまりいないからだ。

毛利敬親は、家臣や民から信頼され、尊敬される人だったのだろう。それは、彼が民のことを案じ、民のことを考えて行動していたからだと思う。私も、彼のように、人のことを考え、人のために行動できるようになりたい。

私が好きな人物は、「吉田松陰」だ。彼は、「松下村塾」を開き、高杉晋作などの偉人を輩出した。

松陰は、何度も獄に入れられながら、自分の信念・志を貫き通した。私だったら、絶対にそんなことはできない。きっと途中で折れてしまう。なぜ、彼は貫き通せたのだろう。もしかしたら、彼は頑固だったのかもしれない。それとも、世

の中がとても荒れていたから、どうにかしなければという気持ちが大きかったのかもしれない。どちらにしても、とても行動的だ。

彼は、獄中で、聞かれていないことまで、正直に話した。自分のしたことについて。それは、とても悪いことだった。普通に考えたら、話す人はいないだろう。その方が自分にとって都合がいいからだ。私でも、きつと話さないとと思う。自分が不利になることは、できるだけ避けたいからだ。

吉田松陰は、行動的で真つすぐな人だった。だからこそ、門下生に慕われたのだろうし、いろいろな積極的な行動ができたのだろう。私は、先のことをうじうじ考えたり、心配のしすぎだったりして、あまり積極的になれない。だから、少しづつ、行動できるようにしていきたい。

毛利敬親と、吉田松陰から学んだことは、行動することの大切さだ。敬親は、藩と民のため、松陰は、日本という国のため動いていた。松陰の場合は、最後まで実行できなかったが、門下生達が成し遂げている。私は、本当に何かをするのが苦手だ。あまり親しくない人と向かい合って話すのも苦手

だ。克服しなければいけないと思いつつも、なかなかできていない。だが、二人のした事を調べるうちに、少し、自分から行動しようかなと思えてきた。例えば、登下校中、積極的に挨拶をしたり、バスや電車でお年寄りに席を譲ったりする。小さいことから始めていきたい。敬親と松陰は本当に素晴らしいことをしたと思う。私も、彼らに一步でも近づくよう、努力していきたい。また、二人のように優しさを忘れないようにしたい。二人とも、優しさからの行動だったと思うから。

幕末の志士・吉田松陰

私は歴史好きな父の影響で、小さな頃から歴史の話聞いて育ちました。その話の中で一番多かったのが幕末の志士達の話でした。

私の住んでいる山口県は、幕末の時代に活躍した志士が多くいます。伊藤博文、木戸孝充、高杉晋作などがそうです。その志士達の中でも私が一番好きなのは吉田松陰です。

吉田松陰は、ペリーが来航した時、密航しようとして牢獄に入れられました。ですが、そこで松陰は囚人と勉強を始め、牢獄の番人さえも囚人達と一緒に勉強し始めたそうです。この話を見て私は思わず笑ってしまいました。想像してみるととても面白かったからです。それと同時に、番人さえも勉強したいと思わせる松陰もすごいなと感じました。この後に松陰は貧しい下級の武士を集め、塾を開きます。この時、「私は教えることはできません。共に学びまし

周南市立富田中学校

二年

吉武

詩織

よう。」と言ったそうです。松陰は「対等」を重視していたのだと感じました。

私が特に好きなのは吉田松陰の言葉です。「自分の価値観で人を責めない。一つの失敗で全てを否定しない。長所を見て短所を見ない。心を見て結果を見ない。そうすれば人が集まってくる。」数ある言葉の中でこの言葉がまさに松陰の教え方なのかなと感じました。松下村塾は総理大臣を二名輩出するというすごい塾ですが、やはり、松陰のこういった考え方の成果なのだろうと思いました。

二〇一五年の大河ドラマ「花燃ゆ」があった頃に私は父と一緒に幕末の志士達について学べる講座に参加しました。その講座では、吉田松陰歴史館や明倫館跡、高杉晋作の生家などにも行きました。行った場所の中で私が一番心に残っているのは松下村塾です。この時、特別に松下村塾の中

に入るチャンスに恵まれ、さらにそこで上田俊成宮司さんのお話を聴くことができました。

入った時の感想は「こんな狭いところで勉強していたんだな」ということです。ですが、こんな小さな部屋からたくさんの偉人が巣立っていったことを思うとこの場のエネルギーの高さを感じられました。その場所に座って、宮司さんのお話を聴いていると、ここで過去の偉人達が何を思い、何を考えながら学んでいたのだろうかと思いにふけてしまいました。この場所で学んでいた人々の息づかいや体温までも感じられる気がしました。

このことがあってから、約三年が経ちました。私はもう中学二年生になっています。職場体験もあり、将来の夢について考える時期になりました。ですが、私には明確な夢がありません。ただ、「人の役に立つ仕事がしたい」という思いは常にあります。親は、「これから考えていけば大丈夫だよ。」と言うけれど、今のうちに夢を掲げている方が夢のために行動できていいのではないかと思えます。だけど、思い浮かびません。

吉田松陰は、思ったことはすぐに行動するタイプだと私は思いました。一方、私は色々考えてしまつてなかなか行動にできないたちなのです。だから、松陰の決断力が羨ましいなと思いました。「こうしたい！」と感じたら、すぐにそれに向かって動き出す、そんな力が私には欲しいなと思えました。

また、親に聞くと「今、自分の目の前にあることを一つひとつ丁寧にやっていくと必ず素敵な未来に繋がっていくよ。」と言ってくれました。今すぐ、吉田松陰のように行動できる人になれないかもしれませんが、毎日の生活の中で少しずつ色々なことに挑戦をし、少しずつ自分を変えていきたいと思えます。

晋作から生き方を学ぶ

山口県立萩高等学校

二年

國廣 奈菜子

松下村塾。それは、私の幼い頃の父との遊び場だった。休日の度に、父と神社を訪れては建物の中をのぞきこんだり、近くにある松陰団子を食べたりするのが楽しみだった。

あの頃はただの古い建物としか思っていなかったが、改めてこの夏に訪れてみて、いろいろと考えさせられることがあった。あの小舎で約五十人も塾生が切磋琢磨して学問を学び、未来の日本について激論を交わし合っていたのを想像すると、心がざわついた。

私は、高校二年生になって、合唱部の後輩の指導に当たったり、先輩を支える存在としての言動に気を遣ったり、また、学習面では、私の志である教師になるために、受験に向けていろいろと準備をしなくてはならなかったりして、自分の生き方について改めて考えさせられることが多くなった。

そこで、新たな気持ちでこの夏に松下村塾を訪れてみた。

そして、「暴れ馬」と呼ばれた松陰門下生の双壁の一人、高杉晋作と、両親から「じゃじゃ馬」と言われる自分自身を重ね合わせた。そして、様々な偉業を成し遂げた晋作の生き方から、何かを学びとろうと思い、彼についていろいろと調べてみた。そして、次の三つについて学ぶことができた。

一つ目は、「常に向上心を忘れない」ということである。松陰先生は、晋作の非凡さを見抜かれ、剣術ばかりにうつつを抜かし、学問に本腰を入れようとしない彼を奮起させるために、あえてライバルである久坂玄瑞ばかりをベタ褒めされた。この深い愛情に満ちた松陰先生の指導のおかげで、晋作は奮い立ち、学問に没頭するとともに、思い切った行動に出るようになった。そして、誰よりも松陰先生から信頼される人材へと成長した。

私が彼のような立場であったなら、自分より才能がある人

と比べられると、その時点でやる気を無くし、努力をしようという意欲はなかなかわかないと思う。しかし、受験や合唱コンクールで良い結果を残すためには、人と同じ事をしていては決して結果を残すことはできない。

私には、向上心とまではいかないが、「負けず嫌い」という特性は大いに持ち合わせているとの自覚がある。晋作の「後れても 後れてもまた 後れても 誓ひしことを 豈忘れめや。」との言葉を肝に銘じ、自分の今の状況に満足するのではなく、誰よりも努力して自身に課せられた課題に対して最大の挑戦をし、乗り越えていきたいと思う。

二つ目は、「誰もが平等である」ということである。四国艦隊下関砲撃事件を機に、晋作が創設したのが奇兵隊である。彼は、志があれば身分に関係なく徴用するという、当時では有り得ない画期的な方法をとった。つまり、やる気さえあれば、武士ではなく農民であつても隊員になれたのだ。このような組織を身分制度の厳しいあの時代に作る事ができたのは、松下村塾で、「人間の価値は地位や身分とは関係ない」ということを学んだからであると思う。

人間は生まれてからそれぞれ様々な環境で育てられ、成長していく。しかし、残念ながらその過程で、貧しいという理由で学校に通えなかったり、見た目が周りの人と違うからといつていじめられたり、また親の身勝手な感情から虐待を受けたりするなど、この世の中には、平等に生きる権利が脅かされている子ども達が実にたくさんいる。しかし環境のせいで自分が持っている能力や個性を活かすことができない状況は決してあつてはならないことだ。

そのような現状の中で、私は何不自由なく生きていることについて感謝するとともに、晋作のように世の中の現状を變革しようとは果敢に行動することができない人間でありたい。

私が教師になって、世の中の役に立つ人材を育成したいという志を果たそうとするとき、現在よりもさらにグローバル化が進み、クラスに外国の子が多く在籍することが予想される。また、障害のある子がクラス内にいることも大いに考えられる。その時に、私は教師として、世の中は平等で公平であるという価値観を、晋作の行動を通して子ども達にしっかりと教え、誰もが楽しく幸せに学校生活を送れるようにした

い。またさらに、不平等を環境のせいにして嘆いてばかりいるのではなく、自分の考え方と生き方次第でいくらでも変革できるということも教えていきたい。

三つ目は、「志を持つ」ということである。松陰先生の、「高杉君、君の志は何ですか。」という問いに、晋作は「学問がしたい。おもしろそうなにおいがする。」と答えたそう。その時は、はつきりとした志まで高まつていかなかったであろうが、高い志を自ら求め、それを留学や尊皇攘夷運動、奇兵隊創設など、具体的な行動として実現させたのである。晋作の心には常に志が満ちあふれていたのだ。

私も、これから時には壁にぶち当たって、悩んで苦しむことがあるかもしれない。しかし、そんなつらい時こそ、晋作の「人間、窮地に陥るのはよい。意外な方角に活路が見いだせるからだ。(中略)だから、おれは困ったの一言は吐かない。」との言葉を大切にしたい。常に心に志があれば、どんな困難でも立ち向かうことができると思う。志は、自分にたくさんのパワーを与えてくれる心の栄養剤なのだ。

この夏、改めて松下村塾を訪れて、高校二年生になってわ

き上がってきたもやもやした気持ちをスッキリとさせることができた。とてもありがたかった。そのような場所が私の故郷にあることを誇りに思うとともに、萩に生まれたこと自体を心から幸せに思う。

萩の身近な偉人である高杉晋作をはじめとする松陰門下生を先輩として仰ぎ、自分の志を果たすために、これから自分の生き方を振り返りながら、前へ前へと進んでいきたい。

明治維新を支えた人

山口県立柳井商工高等学校

一年 川森 澄涼音

「西郷、もう大抵にせんか。」と木戸孝允は最後に言ったそうです。私は、死ぬ間際に西郷隆盛の身を案じながら亡くなった木戸孝允の優しさに感動しました。自分が大変な時でも他の人の心配をしているという部分を尊敬したので木戸孝允について深く知りたいと感じました。だから、木戸孝允を選びました。

幼い頃は、「逃げの小五郎」といわれるほど身を隠すことが上手だったそうです。九歳頃には、長州藩士の岡本栖雲の塾で学び、十二歳の頃には明倫館で佐々木源吾に漢学を学んだそうです。十六歳の頃には吉田松陰に兵学を学び、二十歳では西洋兵学を学んだそうです。このように、様々な知識を取り入れていたので、討幕などの出来事を動かすことができたのではないのでしょうか。私も知識を多く取り入れて、誰かの手助けなどを将来はしていきたいです。

木戸孝允は吉田松陰の教えを受けていたので、ペリーが黒船で来日したとき、「日本が植民地のようになってはいけません。」と言い、薩摩藩と手を組んで討幕を目指すようになりました。もし、吉田松陰の教えを受けていなかったら、日本の未来が変わっていたのかもしれないと思いました。

また、「五箇条の御誓文」の起草に参加し、以後、版籍奉還、廃藩置県を指導したそうです。歴史の授業の中で習った出来事に関わっていたことを知り、山口県民として嬉しく思います。

一八六七年に徳川幕府が倒れ、新しい時代の幕が開くと、ちよんまげを切り、洋服を着て欧米の進んだ政策や文化を勉強したそうです。新しい時代の幕が開くと、それに合うように、自分の服装を変えたり欧米のことについて学んだりする木戸孝允は責任感が強いのだと感じました。

木戸孝允は何度も改名をしています。始めは和田小五郎という名前でした。しかし、病弱で長生きしなれないと思われていたため、桂家に養子へ出され、桂小五郎となりました。その後は、三十三歳に木戸貫治、三十三歳以降に木戸準一郎となりました。そして、三十六歳以降に木戸孝允になりました。命を狙われることもあったので何度も改名していたそうです。

私は、薩長同盟を結んだり討幕を考えたりして、歴史を大きく変化させた人でも、誰かには納得されなくて命を狙われてしまうことに大きく驚きました。私には、物事を動かすという勇気がありません。失敗してしまつたらどうしようという不安にいつも負けてしまいます。自分が他の人と違う意見を持つていても言うことができません。だから、木戸孝允のように、自分の意見を持ち、正しい方へ導いて行けるような人に少しずつでも、変われるようにしたいです。

しかし、大きな出来事を成功させた人にも後悔することがあるそうです。それは、外国との条約の改正ができなかったことだそうです。これを「一生の誤り」と言っていました。

もし、木戸孝允が条約改正をすることができていたら、歴

史が変わり、違う未来があったのかもしれませんが、しかし、改正ができなかったから、起こった出来事もあるかもしれませんが。考えていると、切りがないです。

木戸孝允について調べていると、いくつかの名言がありました。その中でも私が気に入った言葉が二つありました。

一つ目は、「人の巧を取って我が拙を捨て、人の長を取って我が短を補う。」という言葉です。意味は、自分の未熟さや短所を補うためには、人の優れた部分を取り入れるべきであるということなのです。

私は、人には必ずといって良いほど、短所があると思います。例えば、私の短所は、話が長いという部分です。それを補うためには、先生や話すことが上手な友達の話聞きます。そして、自分もその話し方をまねしていきます。そうすることで、人の優れている部分を取り入れることができ、また、短所が補えます。そのようなことをこの言葉は考えさせてくれたので気に入り、実践したいと思いました。

二つ目は、「大道行くべし、又何ぞ防げん。」という言葉です。意味は、信念を持って、自分の道突き進めば、その道

を妨げるものは何もないということです。私は、木戸孝允の名言の中でこの言葉が一番好きでした。

なぜなら、自分の将来なりたい職業に就くために、信念を持ち、自分の道を突き進んで行けば良いのだと感じたからです。しかし、なりたい職業に就くためには、自分の道を突き進むだけでなく、努力も必要だと思えます。木戸孝允も日頃から努力をしていたから、多くのことを成功させられたのだと思います。

だから、私はこれから、就きたい職業に信念を持ち、努力をしながら自分の道を突き進んで行きます。そうすることでその道を妨げるものは何もないのだと思います。このように考えさせてくれたこの言葉を忘れないでいきたいです。

私は、今回、木戸孝允について調べていて思うことがあります。それは、真面目に努力していった人は、成功を収めることができるということです。幼い頃から様々な知識を取り入れていくなどの努力をしていたから、明治維新を成功させられたのだと思います。だから私も日々努力を怠らないようにして、将来、なりたいものになっていきます。

今年は、明治維新一五〇年という大きな節目なので、これを機に、歴史にもっと関心を持ちながら勉強していきます。

吉田松陰先生に学ぶ真心

山口県立柳井商工高等学校

二年 河内 優奈

平成最後の夏、明治改元から百五十年の節目の年を迎える。私の住む山口県は、幕末、日本を大きく動かす歴史の舞台だった。当時不可能と思われた明治維新を成し遂げることができた理由は、新しい時代を切り開くことのできた数多くの偉人たちを輩出した山口県の存在があったからだと思う。

歴史好きの父の影響で、この夏、吉田松陰先生の活躍の地、萩市へと家族旅行を計画していた。松陰神社にある石碑の題字は、佐藤栄作先生による筆であることを知りとても感動した。なぜなら、佐藤先生は、私の住む田布施町から輩出された内閣総理大臣だからだ。私は町民として誇りに思い、山口県民として郷土愛を感じた。

萩市への観光予定間近になったころ、西日本豪雨に見舞われ山口県を含む近県で多くの被害がでた。交通機関にも影響がでたため、先延ばしにした。

近代化され、交通機関の利便性の恩恵を当たり前のよう享受しているが、大自然の驚異の前には我々人間は無力である。科学技術の進歩により、己の力を過信した私たちは今まで何を学んできたのだろうか。それでなくても、現代社会は情報が氾濫し、それに溺れ、自分自身を見失っている。そして、まだ大人と呼べない私たちはSNSに飲み込まれ、疑心暗鬼になり、日々傷ついている。そして、規範意識は薄れ、自分さえよければよい、という考えが蔓延している。

そうした中で、吉田松陰先生の「至誠にして動かざるものは、未だこれあらざるなり」の言葉の意味にふれ、これこそが今の時代に本当に大切な言葉だと私は思った。どんな時にも、真心を持つて相手に接すれば、それで心を動かされない人はいない。すなわち、人を動かそうと思ったら、真心を持つて心で接するべしという信念だ。自分の命さえ顧みず人の

ため、ひいては国のためにと戦い抜いた松陰先生の強さに、私は心をうたれた。それに対して現在、自分さえよければよいと、思いやりの心、困った人に手を差し伸べる勇氣、優しさを忘れている出来事に度々直面する。かくいう私もなかなか行動に移すことができず、後悔することが多い。この度の災害で、猛暑を超えた酷暑の中、被災地で過ごす人々のサポートをされる方、ボランティアの方、災害に遭われた方など大変苦労されていると思う。そうした人々に、私は今、何ができるのか、何をしてあげればいいのか、松陰先生の言葉を思い出しながら自問自答している。

私は小学生に上がる頃、母の勧めで習字教室へ通い始めた。以降、約十年続いている。私は今、将来書道に関することを勉強するために、大学へ進学し、日本文学の道へ進みたいと思っている。私がこれほどにも書道に興味を持つようになったのは、よき師との出会いがあったからだ。そして、私は書道を通して、初めて自分に自信を持つことができた。振り返ると書道の先生は、どんな時も私に真心を持って教えてくださった。半紙に向き合うと、自然と伸びる姿勢は、先生から

学んだことだ。松陰先生も松下村塾で、分け隔てなくどの生徒にも真心を持って接し、一人一人の長所を最大限まで伸ばしたことを知った。自分中心ではなく相手に軸を置き物事を考えることで、教える側も教えられる側も互いに相手を思いやる心を育むことができたのだと思う。そして、こうした松陰先生の思いが国を変え、時代を変え、維新革命を成し遂げたのだと思う。

山と海に囲まれた自然豊かな山口県。いつか私に、ここを離れて暮らす日が来ても、郷土愛を忘れることなく、胸をはってがんばりたい。

今年の夏、初めて私は祖父に暑中見舞いのハガキを出した。私の祖父は、高校の教師をしていた。折にふれ、私に祖父として、先生としていろいろな話をしてくれた。人一倍熱い私の祖父は、一昔前の言葉で言うなら熱血教師であり、吉田松陰先生とは違うタイプの性格のような気がするが、通じることは、相手の気持ちに寄り添い、その人の為なら全力になることだ。ハガキが来たと喜んだ祖父は喜んで電話をかけてきた。私は妹と二人で祖父母の家に遊びに行った。暑い夏の日

に、祖父母の家で飲んだお茶はとてもおいしく、偶然にも萩焼のコップだった。ガラスコップで飲むより冷たくおいしく飲めるそうだ。これも先人の知恵だ。その時、私たちは先延ばしになった萩市観光を、三世代で行く約束をした。

私はこの夏、この作文を書くために、たくさんの歴史にふれ、いろいろなことを考えさせられた。私はこれからどう生きていけばよいか。ただその前には大きな壁が立ちはだかつていて、考えれば考えるほど、答えが分からなくなるのである。そんな時、

「諸君狂いたまえ。」

という吉田松陰先生の言葉にふれた。頭の中で考えても仕方がない。固定観念に縛られても仕方がない。まさに、「狂う」しかないのである。そうすることで人間はどこまでも成長できる。というように私は松陰先生に背中を押されたような気がした。先のことはどうなるかわからないが、とにかく「狂い」ながら前に進んでいきたいと思う。

小さな目標

山口県立柳井商工高等学校

二年

寺尾

友希

「夢を持ちなさい。叶えるために努力をしなさい。夢を放棄してはいけません。」幼い頃から言われ続けた言葉である。

小学生の時はケーキ屋さんになりたかったり、イラストレーターになりたかったり、やりたいことも、夢も、数えきれないほどあった。あれもしたい、これもしたい、と欲張りだった。高校生になった今、自分は何がしたいのだろう、と考えるても、昔のようにはいかない。「私の夢は」の後がでてこない。あと一年もすれば自分の進路を決めるという時期が来てしまう。そう思うと将来が不安になる。そんな事を考えた私への試練だろうか。「明治維新を支えた人々から学び、志について作文を書いてください。」と先生に言われ、今この作文を書いている。始めは、夢がない私に書けることがあるのか、と思っていた。だが、ある人物について調べていくにつれ、私もこんな人になりたい、と思うようになった。小さな

目標が、憧れができた。

吉田松陰。だれもが聞いたことのある名前だと思う。山口県の誇れる存在だと思う。しかしながら私は、「松下村塾で多くの偉人を育てた人」ということぐらいしか知らなかった。何をした人なのか。どんな夢や目標を持っていたのか。私は「知らない」を「知りたいこと」に変えて、吉田松陰という人物について調べてみることにした。

調べていくと、「行動力」という言葉が多く目にとまった。吉田松陰は幼少の頃からとても賢く優秀な子どもだった。畑で仕事をしていても、本を読んだ。常に学び、考えて生活をする。「学ぶ」という考えは吉田松陰をさらに賢くさせていたのだと思う。そして学びへの意欲が松陰の行動力をかき立てた。アヘン戦争で清が大敗したことで、松陰は西洋兵学に興味を持つようになった。それを学ぶために九州へ。起こつ

た出来事に対して、ならば次は違う学問を知りたい、という欲が生まれる。だったら学べるところへ行こう、と、すぐに行動できる吉田松陰には、「行動力」という言葉がすんなり馴染んでいる気がする。「学びたい」「知りたい」と「行動力」はこんなにも簡単に結びつくものだろうか、と私は思った。私ならどうだろうか、と考えてみた。たとえ知りたいことがあったとしても、そのためにあちこちへ行くということはない。私はそう結論づけた。理由は簡単だ。現代はインターネットの時代だからである。分からないことがあれば、極論、一步も動かないでも調べられる。それがインターネットの特徴であり、便利な点だ。便利な時代なのだが、それと引き換えに失われつつあるのが「行動力」なのではないか、と私は思う。少なくとも私は行動力がある人間ではない。だからいつも同じ景色を見て、また今日が終わっていく。毎日その繰り返しだ。九州で学び、脱藩までして東北へも足をのばし、学びを深めた松陰とは正反対だ。私は吉田松陰の行動力がうらやましい。とても憧れる。「憧れ」、そんな風に思った私だが、驚いたこともある。異国からやって来た黒船。ペリー達

を見た松陰は、アメリカやヨーロッパに関心を持ち始めた。大きな船で現れたのだから、松陰にかぎらず、多くの町人達もそう思っただろう。私はその時代に生きる者だとしたら、私だってそう思うはずだ。思うのだ。「アメリカとはどんなところなのだろうか。」そう思うかもしれないが、行ってみよう、とはならないだろう。今のように飛行機で数時間というところの話ではないのだ。ところが「行ってみよう。」と行動するのが吉田松陰である。ペリー達、異国の人々から新しいことを学びたい、と海を渡ることを決めた。小舟に乗って黒船に近づき、乗りこもうと試みた。ついに日本国内では物足りず、外国にまで足をのばすのか、と驚いた。結局、この計画は失敗してしまい幽閉される。しかし、危険を冒しても自分の知りたいことのために行動した、ということは紛れもない事実なのだ。「失敗を恐れず、思いついたらすぐ行動」、という生き方は、私に足りない部分であり、学ばなければならぬところだと思ふ。ただ、何がここまで吉田松陰を動かしたのか。疑問に思い、もう少し調べてみた。すると、こんな一文を見つけた。「志がなければ行動できない。」成し

遂げたいことがあるからこそ、そのために行動するのだ。だとしたら、吉田松陰の志は何だろう。それは「日本をもっと良くしたい。」という思いだったのではないか。そのために、攘夷、倒幕が必要だ、と考えたのだ。目的や志、そしてそのための計画。それらを強く抱いていたからこそその行動力なのだ。そう思うと、夢を持つことの大切さというものが、何となくだが分かった気がした。夢を放棄してはいけない、と言われた意味がようやく分かった気がした。

私にはまだ、はっきりとした夢はない。だが、はっきりとした一つの目標ができた。それは、吉田松陰のようになること。正確に言えば、いつも目的を持ち、計画をたて、周りの出来事に興味を持つ。そんな人になりたい。そして、吉田松陰に学んだ「行動力」を身につけたい。まだ小さな、おおまかな目標ではあるが、作文を書くことをきっかけにできた大切な目標である。少しずつ達成し、大きな夢を持つ日を夢みて、少しずつ努力を重ね続けようと思う。

